

ルヴェリエーの譚

(幼い人々のために)

能田忠亮

幼い頃から、美しい自然の中に、何かいひ知れぬ力を感ずる

様に養けられるといふ事はやがて人生を愛好し、力強く生きる
よすがとせねばならぬでせうか？それはこにかく私は、拙文をも
顧みず次のお話を御紹介致さうと思ひます。因みにこれは

M. Guyau : L'année préparatoire de l'ecole courante

の中にも出てをります。

近世の最も偉大な一天文學者はフランス人でありました。

その人はノルマンデイに生れ、名をジョゼフ・ルヴェリエーと
呼びました。

ジョゼフは六歳の頃、世の賢い子供の常として、夜は早く
から寢床に就きました。夏は太陽が西に没するに共にいね、
冬も殆んど太陽の没するに共に床に入りました。

ところが或る晩のこゝ、家人は彼をつれて、宵のひま時を
戸外で過したこゝがありました。家に歸つたのは、かれこれ
十時でした。

その晩、空は美しく晴れ、空氣は澄みきつて居りました。
突然頭をもたけたこの男の兒は驚嘆の聲を發しました。

「ヤア！御覽！御覽！」

そして彼はいたいけな、紅葉の様な手をして、暗い大空を
指しました。そこには彼が生れて初めて見た数知れぬ光の點
々が一杯あふれて、息吹かばこぼれんばかりでありました。
彼を連れて居た家人は笑ひ乍ら

『あれはお星様です』といひますこ子供は

『お星さまつて、何て美しいんでせう！一體お星さまつて何
です？』

『ジョゼフや、お星さまつてね、どれもこれも皆、夜見える
太陽なんです。そしてどれもこれもみんな、私達の地球の數
十億倍もあるです。お前はもう、晝間かゝやいて居る太陽が
何んなに大きいものであるかを教はつたでせう。あのお星様
たちは大概その太陽の數千倍もあるのです。』

『太陽よりもまだ大きいんですつて！』ジョゼフは了解に苦
しむものの、如くこの言葉をくりかへしました。家人は

『えゝさうですとも、まあお聞きなさい。私どもの地球をこ
の道ばたの小石の一番小さい位なものと考へなさい。するに
太陽の大きさは、小石の一こづみ位になります。さてあのみ空

にかゝやくお星様達は、何うして表はしませうかね。お星様達が私たちに見える爲めには一つの山が必要になります。火の山がネ、何故つてお星様達は火であつて、はてしのない大空の中に、大きな炭火の様に燃えて居るからです』

『—もしお星様がそんなに大きいものでしたら、あんなに小さく見えて居るんですから、お星様はズット遠い遠いところになくてはなりません。』ジョゼフは考へ込むものゝ様に此様に申しました。更に

『お星様は遙か遠方にあるに違ひありません。もしお星様の内ドレカのお星様が太陽のところにあつたとしたら、地球は丁度一きれの麥わらを燃えてをる林に近づけた時の様に、燃えるでせう』

『お星様の距離について考へをはつきりさせてあげませう。よくお聞きなさい。太陽の最初の光が朝私どもにミゞいてきた時、光は太陽と地球の間の空を何の位か、つてきたかを御存じですか？知らないつて、さうでせうとも、言つてあげませうね。たつた、八分間ばかりなのです。此の同じ空間を汽車が全速力で走つても三百年はかゝるのです。光線はそれはそれは速く走るものです。地球のまわりを一またゝきする間にやがて八回も廻る程速いのです。こんなに光線ミいふものは速く走りますが、今私どもの頭の上にあるあの星——人は呼んでシリウス(狼星)ミいひますが——から私どものところまで光

線がどの位かゝつてミゞくと思ひます？、二十二年もかゝるのです。だから今お前の目に見えて居る光線が燃えて居るお星様を出發した時には、お前は未だ此の世に生れて居なかつたのです。まだその外に私達に六十二年もかゝつて見える星や、二千年三千年もかゝつて光のミゞく星もあります』

こんな話をし乍ら家路を急いで歸つて参りました。驚異と感嘆に大きくみはられたジョゼフの二つの目は、家人の顔と青い大空の間を、かはるがはる往來しました。そして手を打ち乍ら

『何んてお星様は美しいんでせう！』を繰り返しました。愈々、家に入りました。

床につく前にジョゼフ・ルヴェリエーはもう一度大空に眺め入りました。そして床に入りましたがその夜中星のチラチラミ輝くのを夢みました。

その夜あつて以來、彼は星空を眺めずには居られなくなりました。そして彼はやがて人間が空間に浮んで居る地球上の凡ての事を知る日のくる事を思ひ乍ら勇氣を鼓舞して研究にかゝつたのでした。

この子供こそはやがて成人のあかつきに、其れまで知られて居なかつた、新らしい星を発見したのでした。それがフランス國の光榮ミなつた事は勿論であります。

その後此の有名な天文學者は、星空を眺める時好んで繰り

返して申しました。

科學は人間を彼れ自ら向上せしむるものである。こ。

ほんまに自然に親しみを覺えた人は幸福であります。常に何か尊いものによつて力づけられるからです。この何物か力強いものによつて向上せしめられ淨化されるからです。そこに人間の誇りがあるのではないでせうか？實に星空の美は世の如何なる美しいものにも優れて美しく奥床しいものです。而も何人も之の美しさを樂しむことが出來ます。石炭文明に酔ひ快樂を求めて止まざる現代の人はもう少し自然に親しんでもよいと思ひます。私達は自然の恩澤を拒否するなくして人生を全うする様に、幼い頃からもつこもつこ教へられてくるべき筈なのに。この立場からして私は幼いもの（一敢て年齢の上の幼いものでなくともいゝと思ひますが）の爲めに心から力を致す人の一人たりとも多からん事を切に願ふものであります。（十月廿五日）

○京都帝國大學第三十一回金曜特別講演

左の通り、

目下開期中。——法學部大講堂で、毎回午後四時十五分開會。入場隨意。

題「近代の天體宇宙觀」

理學博士

山本一清氏

- | | | |
|----------|-----------|--------------|
| (十一月二十日) | 一、ハーシエル以前 | 二、ハーシエルの宇宙研究 |
| (同二十七日) | 三、天體の距離 | 四、星の數如何 |
| (十二月四日) | 五、星の固有運動 | 六、星の視線運動 |
| (同十一日) | 七、星群と星團 | 八、星雲の諸問題 |
| (同十七日) | 九、天體の物理 | 十、宇宙の進化 |

——上海より——

前略

先日來基青の前田氏等發起で天文の會云ふのが出來ました、私も私の事業の都合で積極的活動は出來ませぬが、何は置いても出來得る限りの力を同會に盡したいと思つて居ります。九月二十六日夜當地の日本人高等女學校で丁度時節仲秋の月の會が開かれツァイス、ゴルツ、ロス、二吋半がら三吋の四本の望遠鏡が晴天の八日の月に向けられ、西方印度寺の圓屋根に落ちかゝつてゐる土星、月の光りも眩せぬ美しい木星等を觀測し閉會八時半の豫定が九時過ぎて未だ生徒達は望遠鏡を離れず私さしても實に心嬉しく思ひました。恐らく此の大上海が開けて以來、四基の望遠鏡が並んだ事は當夜が嚆矢だに存じます

十月三日

森義清

山本先生